

前回までのあらすじ

流遠るしおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。

学校があつて、友達がいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまふ。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための

存在——〈機獣少女きじゆう〉だった。

〈カタストロ〉によって疑似的な〈機獣少女〉となったクラウとの死闘から一夜明け、やみひめが目を覚ましたのは、橘アサトの家の一室だった。目覚めたやみひめは、〈カグツチ〉に身体からだのコントロールを預けた際の成長した姿のまま、呼び掛けても〈カグツチ〉の声は返ってこない。

やみひめはツバキから事情を聞き、アサトの家にいる経緯と、彼にすべてを話した事を知る。だが、アサトの態度は以前と変わらず、やみひめは安堵するのだった。

しかし、状況は変わらない。〈カタストロ〉の事、それに取り憑かれた友人・クラウの事、ツバキへの今後の協力について……。

問題は山積みだった。

登場人物

◆流遠るしおやみひめ

地元の小学校に通う、六年生のごく普通の少女。思慮分別が出来る聡明さと、他人を気遣える優しさを持つ。

◆ツバキ・タカチホ

惑星ゼヘナから来た〈機獣少女〉。小学五年生。地球では『高千穂たかちほツバキ』と名乗る。年齢不相応に発育の良い胸がコンプレックス。

◆カグツチ

ツバキのパートナー。〈機獣少女〉の武器であるMBデバイス。時代がかった女性の口調で話す。

◆橘たちばなアサト

高校三年生の少年。今年の夏、やみひめを痴漢から助けた事をきっかけに知り合う。やみひめの片想いの相手。

◆クラウド・P・ブラン

やみひめの親友にしてクラスメイトの少女。小学生離れた大人びた容姿の持ち主で、本人はそれをコンプレックスに感じている。

◆神譲かみじょうハン

やみひめとクラウドのクラス担任。大学の特別制度により、一年間の特別教育実習生として赴任中。クラウドとは親戚。

機獣少女ゾイカルやみひめ **The NOVEL XXXXXXX**

衣擦れの音というのは、妙に艶めかしい。着替えという行為には、必ず『脱ぐ』という工程が発生し、衣擦れの音はそのシーンを想起させるためだろう。それが、若い女性の立てる音であれば尚更だ。

その音を紡いでいるのは二人の少女。

一人は高校生くらしい容姿で、長い黒髪と、吊り目がちな橙色の瞳が特徴的だ。狼のような耳と尻尾が生えているという、もっと目立つ特徴もあるが。

もう一人は小学校高学年くらしい容姿で、セミロングの黒髪を左側でサイドポニーにした髪型と、青く澄んだ穏やかな瞳が特徴的だ。この少女もまた、小学生とは思えない特徴的な部分が他にもある。

年上の少女が袖を通しているのは、どちらかと言えば男性が着るような長袖シャツと長ズボンで、当然のように色々と余ってしまったっている。

「やっぱり、アサトの服でも少し大きい……」

「ズボンは裾を折り曲げればいいですし、袖は指先がちょっと出ている可愛いですよ。それに、シャツは少し大きいくらいの方が楽でしょう？」

年上の少女の戸惑う声に、年下の少女が答えた。その様子は、明らかに立場が逆に見える。

「そう言われてみれば……そっか、あんまりびったりだと、胸が苦しいもんね」

「私の苦勞がお判りいただけましたか、やみひめさん？」

年下の少女が苦笑気味に言うと、年上の少女も同じような表情をした。相手と同じ立場になって、初めて理解出来る事もある。二人の少女の間に、新たな共感のようなものが芽生えていた。

二人の少女の共通点にして、前述した年下の少女の『小学生とは思えない特徴的な部分』

——それが胸囲だ。どちらも、明らかに同年代の少女に比べて発育が良い。年下の少女に限って言えば、年上の少女の年代の平均サイズよりも大きいだろう。男性からすれば魅惑の果実だが、年下の少女にとってはコンプレックスではない。

「ツバキは……窮屈そうだね」

『やみひめ』と呼ばれた年上の少女が、年下の少女に言った。その口調には、どうい言う言葉を掛ければ適切か判りかねるといった雰囲気がありと感じられる。

「……はい。やはり私と同年代が着る普通のサイズでは、ちょっと——」

ツバキと呼ばれた少女は『ちょっと』と言ったが、明らかに控えめな表現だ。彼女の着たブラウスは、胸元が大きく自己主張しており、ボタンもすべては止められていない。これで人前に出るのは、多感な年頃の少女には無理だろう。それ以前に、下手をすると警察

の厄介になる可能性がある。公然猥褻的な意味で……。

「じゃあ、これは？ ツバキには大きいけど、ウエストを何かで絞ればいいよ」

そう言つてやみひめが差し出したシャツを受け取り、ツバキは袖を通す。言われた通りに腰の部分を絞つて「どうですか？」と、その場で回つて見せる。

「うん！ 良いと思うよ」

やみひめの評価の通り、多少、サイズがあつてないようにも見えるが、先ほどのブラウスよりは自然だろう。むしろ、その『ぶかぶか感』がツバキの小柄な体躯とのギャップで、やや背徳的な可愛らしさを演出しているようにも見える。

「そうですか？ じゃあ、これにします。あ——やみひめさんは薄い上着か何かを腰に巻いてください。尻尾を隠さないといけませんから」

二人共に着る服が決まり、候補だった別の服を折り畳んでいく。やみひめが畳んでいるのは、主に男性向けであろう地味めのシャツやズボンで、ツバキが畳んでいるのは小学生くらいの女の子向けの衣類だ。ツバキが畳んでいるそれらを見て、やみひめが口を開いた。

「それ、アサトの妹のだよね」

「だと思えます」

「さつきは訊きそびれたけど、アサトの妹つて、両親と一緒にいるのかな。ツバキは知っている？」

「……口止めされていませんし、橘さんより私の口から話した方が良いと思うので、

お話します」

少しだけ躊躇するように間を置き、

「——行方不明だそうです」

と、ツバキは言った。

「え……」

「三年前の夏に、忽然と姿を消したそうです。当時、小学六年生だったと、橘さんから聞きました」

橘アサト。

やみひめが片想いをしている高校生で、彼女等が今いるのも、彼の家だ。

アサトの妹が失踪した当時の状況。それが原因で母親は心を病み、今は実家で療養しており、父親は傍についている事。ツバキの口から語られた内容に、やみひめは愕然とした。

「……だから、『お兄ちゃん』って呼ぶと微妙な顔してたんだ」

「そのようです」

やみひめが沈痛な面持ちで黙り込むと、場を持たせるようにツバキが言葉を紡いだ。

「これは先日、クレープをごちそうになった際に聞きました。橘さんが、暇があれば公園や商店街を散策しているのも、妹さんがいるかもしれないからだそうです」

「そうなんだ……」

再び黙り込むやみひめ。見た目は高校生くらいに見えても、実際には小学六年生の子供だ。その事実には、受け止めるには重いだろう。

「——どうして、橘さんは私に話してくれたんでしょうね？」

「え……？」

ふいに発されたツバキの問いの意図が判らず、やみひめは反射的な返事しか出来なかった。

「やみひめさんには話していなかったのに、私には話してくれた。もしかしたら私、やみひめさんより気に入られてしまったのでしょうか」

ツバキは普段通りの澄まし顔と口調だが、先の発言からは、どことなく挑発的なニュアンスを感じられた。ライバルに対して、自分の方が優れていると自慢するような。普段の彼女であれば、ありえない態度だ。

「……そうかもね」

「——」

「ツバキは可愛いし、性格も大人っぽいし、良い子だから。アサトだって、ツバキみたいな女の子の方が好んで、話しやすかったのかも……」

ぼそぼそと咳くように言うと、やみひめは俯うつむいてしまう。

「それでいいんですか？ 私が橘さんをもらってしまったも」

「だって、決めるのはアサトだから……」

「やみひめさんは——それでいいんですか？」

ツバキの囁ささみで含めるような言い方に、やみひめははっとして顔を上げた。

「やだ……そんなの嫌だよ……うっ……」

堪こたえきれず、橙だいだい色の瞳から涙がこぼれる。嗚咽おえつと悲しみで上手く言葉が出せず、やみひめはただ、駄々をこねる幼児のように、「嫌だ」としか言えなかった。

「……すみません、やみひめさん。私は橘さんを奪うばったりしませんよ」

ツバキが困ったような笑顔を浮かべ、泣きじやくるやみひめの身体からだをぎゅっと抱いた。

ツバキの方が明らかに小柄なので、傍はたから見れば、やみひめの方が相手を慰めているように見えるだろうが、実際には真逆だ。

「橘さんが私に話してくれたのは、私が行きずりの人間だからです。あの時は、私はやみひめさんの家に遊びに来た親戚の子で、そう何度も会うとは思っていなかったはず。特に親しい訳でもない相手の方が、話しやすい事もあります。親しい相手であれば、話して気まずくなったりするのが嫌だったりしますから」

「……そうなの？」

優しく語りかけるツバキの口調に落ち着いたのか、やみひめは半信半疑といった様子で訊いた。

「やみひめさんにもありませんか？ 誰かに話したいけど、話しづらい事。私にはありません」

「……………ごめん。ちよつと思いつかない」

「そうですね。でも、それは幸せな事だと思いますよ」

咄嗟にそういう話かと思いつかないやみひめに、ツバキは微苦笑を浮かべて答えた。

「橘さんがやみひめさんに話さなかったのは、困らせたくなかったんだと思います。さっきのように」

「あ……」

そこで気付いた。先ほどの挑発するような態度は、ツバキなりの荒療治だったのだと。アサトの抱えていた事情に、自分まで落ち込んでしまっていたやみひめを、奮い立たせるための。

「大事に想われているんですよ。だから、もっと橘さんを信じてあげてください。そして、支えてあげてください。妹さんの事も含めて。ね？」

我が子をあやすような慈愛に満ちたツバキの笑顔に、やみひめは破顔した。

「うわあああん……ツバキいゝ、ごめんねえ」

「もう。判りましたから、泣かないでください。そろそろ行かないと、橘さんが待ちくたびれてしまいますよ？」

妹をなだめる姉のような苦笑を浮かべ、ツバキは自分の胸元に顔を埋めて泣くやみひめの頭を撫でた。

結局、やみひめが泣きやむまで、更に十分以上の時間を要した。

第十三話

『機獣少女と新たな決意』

着替えを終え、ツバキと一緒にリビングに戻ると、アサトが猫のベアトリーチェを膝に乗せ、肉球をぶにぶにと指で押していた。私はそれを見て、飼い猫を可愛がっているというより、家族の買い物に付き合わされた父親が、待合所で暇そうにしている光景が浮かんだ。

「お待たせ、アサト」

「ん。随分と時間がかかったな」

私に返事をするアサトの態度は不機嫌じゃないけど、やっぱり、待ち時間が長かったみたい。

「——『女の子の支度は時間がかかるものだにやー』」

ベアトリーチェを抱き上げ、腹話術のように言ったのはツバキだ。

「ツバキ、やっぱりベアトリーチェに台詞を当てるのが楽しくなってるよね」

「今のはベアトリーチェの心の声を代弁しただけです。ですよね？」

ツバキが同意を求めると、抱き上げられた格好のまま、茶色の毛並みの日本猫は、にやーと鳴いた。

「ほら」

「……確かに、『うん』って言ってる気がする」

ベアトリーチェは不思議な猫だ。本当に私達の言葉を理解しているみたいに思える。

「——ん？ ツバキの着てるシャツ、俺のか？」

ふいに、黙って私とツバキ——とベアトリーチェ？——の会話を聞いていたアサトが言った。

ツバキが着ているのは、下は用意された膝丈スカート^{ひざたけ}だけど、上はアサトのTシャツだった。ちよつとぶかぶかだけど、女の子だとそれも可愛く見える。ツバキの服は昨夜の騒動で少し汚れていたから、せつかくだからと、私と一緒に着替えたんだけど。

「はい。妹さんのトップスはサイズがちよつと……」

「あー……なんか、すまん」

ツバキは部分的に発育が良いので、普通に同年代の女の子が着る服だと、窮屈になってしまう。

そう——胸が。

それを察したからか、アサトの態度も若干、気まずいものだった。

……なんだか、面白くない。

「気にしないでください。おかげで橘^{たちばな}さんのシャツが着れましたから」

「？」

ツバキの言葉に、アサトがきよとした反応を示す。私もだけど。

「――橘さんの匂い(にお)がします」

袖(そで)で口元を隠して、伏し目がちにそう言ったツバキの頬(ほお)は、少しだけ赤くなっている気がする。口調も仕草も妙に艶(つや)っぽいし、なんというか……すごくイケナイ感じがする。

「っ、ツバキ……?」

「アサトは見ちや駄目(だめ)えええ——ッ!?!」

私はどうしていいか判らず、咄嗟(とつさ)にアサトの視界を両手(ふたて)で塞(ふさ)いだ。

「やみ子、痛い、前が見えん、目が潰れるだろ!」

「もう! アサトの馬鹿! えっち!」

「俺は悪くないだろ!」

「知らないもん! 馬鹿! ダメ人間!」

半分パニック状態で、私はひたすらアサトを責める言葉を言い続けた。



「……もう。ツバキの冗談(いたずら)は悪趣味(あくしゆい)だよ」

「ふふふ。すみません、ちよつとした悪戯心(いたずらこころ)だったのですが」

さっきの『アサトの匂い』発言は、ツバキなりの意趣返し(いたずらかえし)だったらしい。アサトに、サイズの合わない服を着せてツバキを困らせよう——なんて意図(いとう)がなかったのは判(わか)ってるはずだけど、ちよつとした悪戯心(いたずらこころ)が生まれてしまったらしい。

「まったく。いい迷惑(めいわく)だ」

ツバキの目論見(めいろんけん)は大成功(だいせいこう)で、アサトは私に押し倒(おしおた)される結果(けいこ)になった。別に怪我(けが)とかはしてないけど。

「……本当に迷惑(めいわく)だったの? ツバキにあんな事(こと)言(い)われて、喜んでたりして」

「まあ、ちよつとはときめいたかな」

私がジトツとした目で見ると、アサトはそんな事を言った。いつもの無表情(むへいじょう)だけど、満更(まんそう)でもなかった感じが伝わってくる。

「やっぱり! 私(わたし)だってアサトのシャツ着(き)てるんだからね! に、匂(にお)い嗅(か)ぐよ!?!」

「ちゃんと洗濯(せんたく)してあるから、匂(にお)いなんてする訳(わけ)ないだろ」

「なに、その反応(はんおう)の違い(ちがひ)!?!」

「お前の言動には色気がないんだよ。見た目は成長しても、しよせんはやみ子だな」

「う〜……」

アサトの言う事は判るけど、それでも悔しい。

色気って、どうすればいいんだろう？

「ほら、そろそろ行くぞ。何時まで玄関にいるつもりだ？」

「行きましょう、やみひめさん。すぐに夜になってしまいますよ？」

アサトとツバキに促されて、私はしぶしぶ靴に履き替えた。(機獣少女になった時に、服と一緒に靴も変化して元に戻っていないので、靴も借りる事になった。アサトのお母さんのものが残っていて、サイズが合うものがあって良かった。

「いつてきますね、ベアトリーチェ」

ツバキはすっかり気に入ったみたいで、見送りみたいに玄関までついてきたベアトリー

チェの前に屈んで、挨拶をしていた。

「じゃあね、ベアトリーチェ」

私もそれに習って、ベアトリーチェに声を掛けた。

——にやー。

ベアトリーチェの鳴き声は『いつてらっしやい』と言ってくれているみたいに聞こえた。



アサトの家を出て、バスに乗り、街に着く頃には夕方になっていた。当初の目的の髪留めを買うだけなら商店街でも良かったけど、気分転換ならと、街まで出る事になった。

「さて、街まで出た訳だが——どうする？」

「え、ノープランなの？」

「俺が女物の服の店に、心当たりがあると思うか？」

「あはは。だよね」

「……それはそれで腹が立つリアクションだな」

アサトが私の頭を少し乱暴に撫でる。自分で言わせた癖に。

「ちよっと、帽子がずれちゃうよ。耳が見えちゃう」

慌てて私は帽子を抑える。尻尾は上着を腰に巻いて隠して、頭の耳は帽子を被って隠している状態だ。

「見られてもコスプレだと思われるだろ」

「こんな場所でコスプレしてたら、イタイ子だと思われるよ」

前にお母さんには見られたけど。

「先日のお店では駄目なんですか？」

アサトに文句を言う私に、ツバキが訊ねた。日曜にツバキの日用品を買いに行ったデパートの中のお店の事だろう。

「いちいち客の顔なんか覚えてないだろうが、やみ子の事を訊かれたら面倒くさいだろ？ 同一人物だとは思われないだろうが、姉妹かなにかだと説明するのも、それはそれで面倒くさい」

「確かに、そうかもしれませんね」

「じゃあ、私が知ってるお店があるから、そこに行こう。子供向けから大人向けまで、色々あるよ。くらうに教えてもらったんだけど——」

自分で言ったにも関わらず、『くらう』という名前に気まずくなって、言葉が出なくなってしまった。

私の友達で、昨夜戦った相手。

あの時のくらうは、私を『流遠やみひめ』だと認識していなかった。(カタストロ)に操られているのかどうかは判らないけど、自分の意思で私を攻撃したんじゃないと思う。そう思いたい。

「やみひめさん……」

「あ、大丈夫だよ。ごめんね、心配させて」

ツバキが気遣うような表情だったので、私は平気な風を装った。きっと、出来てはいなかったと思うけど……。

「——なら行くぞ。何処なんだ？」

「アサト？」

「考えたって仕方ない。今は、その辺の事は考えるな」

くらうの事。

この姿の事。

(カグツチ)の事。

そして、ツバキとの今後の事——

考えなきゃいけない事はたくさんあって。

でも、考えると頭がパンクしそうで。

「……いいのかな、それで」

「いいんじゃないか。俺ならそうする」

「アサトのは、ただの現実逃避だよね」

「誰もが現実には立ち向かえる訳じゃない。逃げるのも選択肢だ。現実逃避、大いに結構」
微塵も悪びれる事なくそう言われると、それでいい気がしてくる。それは、私もそう思
いたいからだと思うけど。

「私も、それでいいと思います。やみひめさんが一人で抱え込んで、思い悩む必要はあり
ません。元はと言えば、私がこの星に来た事が原因なんです」

「ツバキのせいじゃないよ！ ツバキだって、訳も判らず地球に跳ばされたんだから」

「でも、やみひめさんを巻き込んだのは私です」

「違うよ。私が首を突っ込んだだけ」

「ですが——」

「ストップ！ この話はここまで」

危うく責任の押し付け合い——自分自身にだけど——が始まるどころだった。それこそ
終わりが無い。

「そうだよ、今は考えない。そうする！」

無理矢理だけテンションを上げて宣言した。こんなのは空元気^{から}だけど、それでも、な
いよりはマシだよね。

「はい、そうしましょう」

空元気なのはツバキも判ってると思う。それでも、気付いていないふりをして、微笑ん
でくれる。私より年下なのに、私より大人で、強い女の子。

私はツバキの力になりたいと思った。

手伝ってあげたいと思った。

それが始まり。

その気持ちは今でも変わっていない。

だけど——



大通りからは外れた、ちょっとだけ奥まった場所にそのお店はあった。いわゆる大衆向
けの衣料品店というより、『ブティック』という言い方が似合う、お洒落^{しゃれ}な雰囲気。アサト

は入る前から『帰りたい……』なんて言っていたけど、女性用の商品しか扱っていないから、確かに男の人は居心地が悪いかもしれない。

「うん……いつものリボンにするか、シュシュもいいけど——ツバキは普通のヘアゴムしかないの？」

「そうですね。手軽ですし、予備も高張りかさばりませんから」

「そうなんだ。でも、リボンも似合いそう。お揃いそろにしてみない？」

「あまり派手なものでなければ、喜んで」

髪留めなどを置いてある装飾品コーナーで、かれこれ三十分くらい、私達はあーだこーだと商品の物色していた。デパートではないので当然、休憩所なんてないし、男の人が一人で来るようなお店じゃないから、アサトは私達の近くで所在なげにしている。

「すみません、橘さん。退屈ですよ」

「あ……君達が楽しめてるならいい」

ツバキが申し訳なさそうに言うと、アサトは苦笑した。退屈なのは否定しないところが、アサトラしい。

「じゃあ、アサトが決めて。これとこれ、どっちが良いと思う？」

いつも使ってる布製のリボンと、あまり使う機会がないシュシュを手を取って見せる。

どちらも色は赤。

「ん。こっちだな」

アサトが選んだのはリボン。逡巡しゆんじゆんなしだったけど、面倒だからじゃなくて、リボンの方が私らしいと思ってくれたんだと思う事にする。

「じゃあ、それにする」

「ツバキも同じのでもいいのか？」

「え？」

「お揃いにするんだろ？」

「でも、橘さんに買っていたく理由が……」

「今日も付き合ってくれただろ。大した値段じゃないしな。俺が少し生活費を削ればいいだけだ……」

『も』っていうのは、クレープと一緒に食べた事だと、なんとなく判った。ツバキに気を遣わせないために言ったんだと思うけど、だったら、最後のは明らかに余計だ。

「けど、ツバキにはこっちの方がいいんじゃないか？ そのリボンだと、サイドポニーには派手だろ？」

そう言っアサトが指したのは、私が選んだものより細長い、紐ひもっぽいタイプだった。

確かに、こっちの方がツバキのイメージに合うかもしれない。ツバキも気に入ったみたいで、ちよつとだけ高揚しているように見える。

「あの、こちらでもいいですか……?」

ツバキが窺うかがうように私に言った。お揃いじゃなくなるのが悪いと思っっているのかもしれない。

「うん！ 色は同じだし、こっちの方が似合うと思うよ」

「では……買っていただいてもいいですか、橘さん」

「ああ。……うわ、こんなにするのか。やみ子の倍以上だぞ——」

値段を確認していなかったみたいで、アサトが値札を見て愕然おどろとしていた。台無しだ。

「あの、橘さん……私は別のものでも——」

「いや、気にするな。一日くらい食わなくても、人間は死なない」

いくらアサトでも、年下の女の子の前でくらは格好付けたみたい。ツバキの気遣いも振り払い、レジに向かって行った。本当は服も試着するつもりだったけど、これから晩御飯を食べる事を考えると、そんな時間はなさそうだから。

「橘さんに悪い事をしました……」

「ツバキのせいじゃないよ。アサトの自業自得だから」

「ですが——」

「それに、ツバキに喜んでほしくて買ってくれたんだから、そんな顔してる方がアサトに悪いと思っっよう?」

目に見えてしゅんとしているツバキを見て、私はそう言った。

ツバキはちよつと内罰的だ。他人ひとの事は励むませても、自分の事は許ゆるせないみたい。なら、周りが許ゆるすしかないと思う。ツバキが、自分で自分を許せるようになるまで。

「そうですよね……私、自分の事ばかり考えていました」

「ううん。誰だつて、自分の事で精一杯だよ。私も——きっと、本当はアサトも」

「そうかもしれないね……」

私のらしくない発言に、ツバキが苦笑気味に答えた。

「あはは。なんか、小学生の女の子の会話じゃないよね」

「ふふ。まったくです」

そう言つて、今度は一緒に笑つた。これもかなり苦笑気味だったけど。



お店を出ると、外はだいぶ暗くなっていた。まだ七時前だけど、九月も終わり頃になると、陽が沈むのも早い。

「ほれ。こっちがやみ子。こっちがツバキのだ」

アサトから、個別に包装された髪留めを受け取る。そういえば、アサトからプレゼントを貰うのは初めてだ。

「ありがとうございます！ 大事にするね」

「ありがとうございます。私も大事にします」

私とツバキの感謝の言葉に、アサトは珍しく戸惑ったような顔をした。女の子にプレゼントをするのは初めてなのかもしれない。

「あー……大事にはしなくていいから、使ってくれ。そのために買ったんだしな」

「アサト、もしかして照れてる？」

「そうなんですか？ 橘さんは、やはり意外と初心なんですわね」

「うっさい。さつさと飯食って帰るぞ。この面子で補導はご免だ」

アサトが足早に大通りに向かって進んでいく。やっぱり照れてるんだ。

「ツバキ、何食べたい？ 私、回らないお寿司がいいな」

「却下だ。お前は俺を餓死をさせたいのか？」

「えく。餓死しないために食べに行くんだよ？」

「お前、判ってて言ってるよな」

もちろん判ってる。回らないお寿司なんて行ったら、アサトの生活費はなくなっちゃうと思う。

「私はファミレスで構いませんよ。色々ありますから」

「……ツバキは良い子だな。頭を撫でてやろう」

「ずるい！ 私、牛井屋でいいよ！」

「この面子で行くようなチョイスじゃないな」

「橘さん……は、恥ずかしいです——」

「もう！ アサト、私も撫でてよ！」

「うるさいぞ、やみ子」

そんな騒がしいやり取りをしながら大通りを歩いていると、街頭テレビの前に人だかりが出来ていた。特別な映像じゃなくて、地上波で放送されている番組を垂れ流しているだけだから、こんな状況は珍しい。何か大きな事件でもあったのかもしれない。

『——にて、少女と思われる人物一名と、警官十数名が衝突する事件が起こっています。』

現場では発砲許可も出されており、危険な状況だという事です。近隣の住民には避難勧告

も出されており——』

街頭テレビから流れるニュースキャスターの声に、私の肌は粟あわ立った。ちゃんと全部の内容を聞いた訳じゃないけど、たった一人で警官十数人を相手に出来る少女なんて、私とツバキ以外には、心当たりは一人しかいない。

「くらうだ……」

どうしてこんな状況になってるかなんて判らないけど、今はローカルニュースだから、まず間違いないと思う。

「すみません。今のニュースの事件の場所 判りますか？」

「え？ ああ、県病院のすぐ近くだよ。危ないから、行っちゃ駄目だよ？」

ツバキはずっと街頭テレビを観ていたらしいおじさんに話を訊きいていた。県病院は最寄もより駅から二駅乗って、そこから徒歩で五分とかからない距離にある。

「ありがとうございます。もう帰るところですから」

ツバキがお礼を言うと、おじさんはすぐにニュース番組に視線を戻していた。

「ツバキ、今のニュースって……」

「クラウさんでしょう。他に考えられません」

「けど、そうと決まった訳じゃ——」

「この星に、たった一人で警官十数名を相手に出来る女の子が、私達以外にいますか？ 発

砲許可まで出ているなら、プロレスラーたぐいの類たぐいでもないでしょう」

ツバキは断定した。別の可能性なんてない事は判っていたけど、それでも、認めたくなかった。

「……………」

「……やみひめさん、此処ここでお別れです。橘さん、やみひめさんをお願いします」

「待て。行っても、君はまともに戦えないんだろ？ それじゃあ——」

「なんとかします。なんとかかりますよ」

ツバキはいつもの澄まし顔に微笑を浮かべた。

「……そうか。やみ子、帰るぞ」

「え……?」

帰る？ このままツバキを行かせて？ 私達だけで……?

「でも、ツバキは——」

「ツバキが大丈夫だって言ってるんだ。それに、お前はもう戦いたくないんだろ？」

「……………そうだけど」

「なら、行かなくていい。もう関わらなくていい」

アサトの言葉は淡々としていて、正論で、何も言い返せない。何より、私自身がアサトの言葉に同意している。

「だけど——それでいいの？」

「いいはずない。」

「くらは友達で、ツバキだって友達で、二人とも助けたい。」

「そうだ。答えは最初から決まっている。」

「ただ、その勇気がなかった。」

「実戦の怖さを知ってしまった。傷付く痛みを知ってしまった。」

「あんな思いはもうしたくない……。」

「だけど——」

「アサト……私、行くよ」

「お前にそんな義務はないだろう。ただの小学生の女の子に——」

「違うよ。私は——《機獣少女》だから」

それは、初めて会った時からツバキが言っていた台詞^{せりふ}。私は、それを強迫観念みたいに感じていた。そう繰り返す事で、ツバキが自分の使命を確認しているみたいに思っていた。でも、きつと違う。

「上手く言えないけど、今なら違うと思える。」

「だって——今の私は、微塵もそんな風感じていないから。」

「ありがとう、アサト。心配してくれて」

「……………」

「アサトは無表情で、何も言わない。愛想を尽かされちゃったかな。」

「一緒に行こう、ツバキ。私、ちゃんと戦えるか判らないけど、ツバキよりは役に立つよ」

「……………」

「ツバキも返事をしてくれない。俯^{うつむ}いているから、表情も見えない。」

「……ツバキ？」

「『私より役に立つ』——ですか。《難攻不落のツバキ》も舐^なめられたものです」

「あ、あれ？ 肩が震えてるし、ツバキ、もしかして怒ってる……？」

「けど、もう難攻不落なんて言われませんか。すでに何度も、私はやみひめさんに落とされてしまっていますから」

「そう言っつて顔を上げたツバキは、泣いていた。肩が震えていたのは、泣いているのを隠そうとしていたんだ。」

「ごめんね。私のためを思って、一人で行くようにしてたのに。でも、一緒に行かせて？ ツ

バキ一人でなんて、行かせられないよ」

震えるツバキの身体からだをぎゅっと抱いて、私は思ったままを伝えた。こんな状況、出掛けの前にもあったな。

「……違うんです。私も怖かったです。今の状態で戦う事もですけど、やみひめさん達と此処ここでお別れする事が……もう会えないかもしれない事が——」

「そっか……ごめんね。私、まだツバキの事、ちゃんと判ってなかったね」

出会ってまだ一週間くらいしか経ってないんだから当然だけど、もうずっと一緒にいたような気がしていたから。

「——そんじや、行くか」

「アサト？」

「二人だけで行かせると思うか？」

「だって、行かなくていいって」

「行きたくない奴を行かせても仕方ないだろ。けど、自分の意思で行くっていうなら、俺は止めない」

そっか。私はアサトの事も、ちゃんと判っていなかったんだ。

アサトはこういう人だって、知っていたはずなのに。

「でも、危ないよ？」

「……お前、一般人の俺まで戦わせる気か？ 俺のスペックは知ってるだろうに。現場まで付き合っただけだ。それでいいか？」

男の子としてはちよつと情けない発言だけど、私はこういう正直なところ、嫌いじゃない。だから、答えは決まっている。

「——うん。充分だよ！」

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』第十三話をお届け致します。

先月は『Z A O D』があったため休載したので、二ヶ月ぶりです。たかが二ヶ月、されど二ヶ月。この間に他の掌編もいくつか書いていたので、執筆中は妙に新鮮な気分でした。

前回はお約束の『お悩み回』。今回はお約束の『立ち直り回』。お約束のオンパレードですが、正直、物語とはお約束の積み重ねです。開き直るのもどうかと思いますが、その作品らしいお約束展開であれば、それは『王道』であって『マンネリ』ではないと思いたい。

良きところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

いよいよ最終話が見えてきました。もうちょっとだけ、少女達の物語にお付き合いください。恐らく、次回はサイドストーリーになると思いますが。

——女の子の泣き顔は好きですか？

僕は嬉し泣きなら大好きです。

美少女は泣き顔も美しい。

だって、美少女だから。

2015 / 12 / 7 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る